

横井 弘海
時事通信社
特約記者

火の国アゼルバイジャンを旅する

アゼルバイジャンとは「火の国」という意味だという。近年、カスピ海のACG油田の採掘、天然ガスの生産が開始されるなど、資源大国であることは日本でも知られている

ので、旅する前から言葉の意味はなんとなくイメージできたが、日本で得られる情報にはまだ限りがある。未知の国への旅に心が躍った。

石油の恵み、国際都市バクー
世界最大の湖（塩湖）、日本の国土とほぼ同じ面積をもつカスピ海西岸に小さく突き出たアブシェロン半島南岸に広がる港

バクー 処女塔



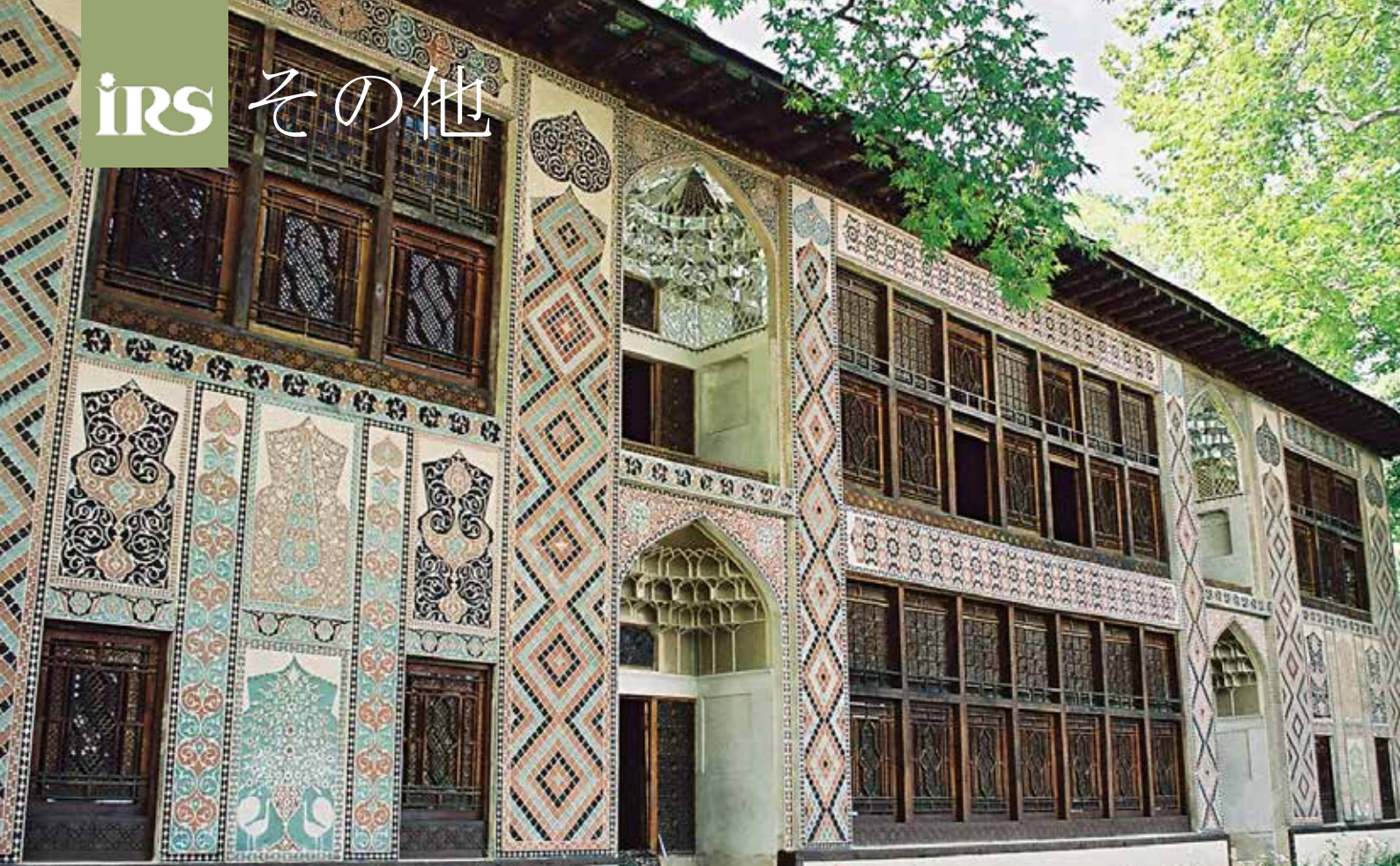


町、バクー。町の発展はつねに石油と共にあり、町は、その時々を歴史を反映した姿を残している。

13世紀にマルコ・ポーロが書いた「東方見聞録」に、バクーは「油田があり、一時に百隻の船に積み込めるだけの豊富な湧出量をもっている」と記されている。城壁で囲まれたシルヴァン王朝時代（9～16世紀）の街、旧市街の迷路のような小路を歩いていると、古の賑わいが聞こえてくるようだ。15世紀に建設された

歴代国王の居城跡「シルヴァンシャー宮殿」の優美なイスラム建築、現存は12世紀に建造された高さ29.5メートルの要塞「乙女の塔」、レストランに姿を変えたキャラバンサライなど、中央アジアの雰囲気たっぷりだ。帝政ロシア時代、バクーは石油により国際都市として再び発展する。さらに、ソ連時代と、旧市街の城壁を取り囲むように町が広がった。往時を偲ばせる欧風の豪華な建造物は修復され、官公庁や銀行として利用されてい

る。そして、独立して20数年。現在、活況を呈する経済を背景に、さらに重層的に町は広がり、整備を進める公園には緑があふれ、クレーンと真新しい高層ビルが目につく。ヨーロッパのブランドショップが立ち並び、大通りを闊歩する若い女性たちの姿は東京の表参道と変わらない。しかも、さすがマルコポーロの時代から外国人と接してきたDNAなのかと感心するほど、皆一様に人懐っこい。飲酒も自由なので、



シャキー 王殿

イスラム教国のイメージも覆される。「お酒を飲んで良いのですか？」と尋ねると、「もちろん。何故？」と、レストランのウェイターがにっこり微笑みながら聞き返してきた。新しいランドマークは「フレームタワー」だ。総工費約3.5億米ドル（約350億円）をかけたバクーの高さ190メートルを誇る複合ビルで、燃え盛る炎をイメージした3つの棟からなり、町のどこから見上げられる。そびえ立つビルは、国の自信とバイタリティを象徴しているようだった。

「永遠の炎」バクーの町を離れると、高層ビルはなくなり、埃っぽい荒野になる。北西に約25キロ。人気のない石油採掘場を過ぎたところに、「ヤナル・ダグ」と呼ばれる天然ガスが地表の割れ目から噴き出し、火が燃え続けている場所がある。低い丘の斜面や地面、幅7～8メートルの地表から1メートルくらいの炎が立ち上る。見学のためのプラスチック製の椅子やテーブルが無造作に置かれているが、特に演出はなく、柵も無く、炎にいくらでも近づくことができ

る。ただし、近くに寄るとかなり熱いという、体験型アトラクション？である。かつては国のあちこちに天然ガスが吹き出し続ける場所があったそうだ。古代人はさぞ不思議に思い、畏敬の念を持って眺めたことだろう。それが理由なのか、イスラム勢力がこの地にやってくる前に、拝火教（ゾロアスター教）が栄えた時代があった。バクー旧市街にある乙女の塔も、最初に塔が建てられた紀元前5世紀には、拝火教寺院だったと聞く。

バクーの東30kmの所には、かつての拝火教の寺院が残

っている。「永遠の炎」と呼ばれる聖なる炎が燃える本殿と、それを囲むように宿坊の建つ簡素な寺院が残り、当時の僧侶の厳しい生活の様子を出土品や人形などで紹介している。観光施設となってから、火はバーナーで調節しているようだが、「ヤナル・ダグ」のように地面から噴き出す炎を「永遠の炎」と崇め、当時の人々は何を祈ったのだろうか。「火の国」とは、単に「火」ではなく、「炎のように永遠に燃え栄える」という意味がこめられているのかもしれないと、「永遠の炎」を眺めながら感じた。

古都シェキ

アゼルバイジャンは、黒海とカスピ海を結ぶように東西約1100キロにのびるコーカサス山脈の南に位置する「コーカサス」の国である。面積は日本の約4分の1の87000平方キロ。高い山脈や「長寿の国?」「ヨーグルト?」のイメージを探すなら、バクーから北西に320キロ離れたシェキを訪れてみてはいかがだろうか。コーカサス山脈に近いこの町はシルクロードの町で、かつて、ここから欧州へ生糸を運んだ。



また絹織物、絨毯、刺繍、メタルワーク、陶芸など工芸品の産地でもある。

人口7万人弱、山間の小さく静かな町の家並みはバクーとは異なり、「昭和」のような雰囲気だ。ガラス張りの床屋から笑い声が聞こえたので、近づいてみると、男性がたむろしてお喋りに興じていた。ここでも皆、笑顔で何か話しかけてくれる。

歴史的建造物は、昔、庶民とは全く異なる世界があったことを伝えるように豪華だ。隊商を泊めるために当時の王が作ったコーカサス地方一規模の大きいキャラバンサライが、趣あるホテルとレストランに姿を変えていたり、1763年に高台に建てられたシェキ宮殿と呼ばれる王の夏の宮殿は必見である。

宮殿は6室からなる木造2階建てで、当時の技術の粋を集めて作られ、一本の釘も使わず、外観は幾何学的模様タイルやテンペラの壁画に彩られている。内部も繊細で、5000枚とも言われる細かなステンドグラスの窓から色とりどりの光が差しこみ、装飾タイルや壁一面に描かれたフレスコの細密画をうつし出す。狩猟や戦いの場面や花鳥など、当時の王の生活を垣間見ることができ、壁画は見とれるほど美しかった。

カスピ海とキャビア

カスピ海といえば、ぜひお目にかかりたい、いや味わいたかったのがキャビアである。世界の三大珍味のひとつ、チョウザメの卵の塩漬けは、近年、チョウザメの漁獲高の激減により超高級品と

なっているものの、産地の状況はちがうかもしれないと、密かに期待していた。

30歳の現地ガイドのチンギスさんによれば、「子供の頃は、キャビアをスプーン一杯すくって、一口で食べるのは普通だった」と、夢のようなこと言う。市場にも普通に売っていたと言うので、近くの市場に寄ってもらった。

市場は旧市街と同じく、人々の顔つきや服装も中央アジアの空気がいっぱい、また、活気に満ちていた。野菜、果物、ナッツ類、肉など、なんでも豊富に並んでいる。女性が仕切る店が多い中で、男性が切り盛りしているのが肉屋だ。牛や羊の頭部を店先に並べ、切れ味鋭そうなナイフを持って歩く店員の姿にはドキッとするが、やはり皆、笑顔がいい。

アゼルバイジャン料理はトルコ料理に近いように感じた。食材が新鮮で、味付けはシンプルだから飽きない。そして、「肉がなければ、食事ではない」というお国柄だ。市場では牛肉1キロ7.5マナト（約950円）程度。5人家族なら一回の食事用に

1キロの肉を買っていくのが一般的だということ。ところで、残念ながらキャビアらしきものは見当たらなかった。中央市場に行けばあるかもしれないという話だったが、キャビアがすでに地元の人の食べ物でなくなっていることだけは確かなようだ。

北にロシアとグルジア、南は伝統的に関係の深いイラン、西に民族や言語が近いトルコがあり、東はカスピ海。さまざまな民族、宗教、文化が出逢った国の歴史を表すように、それぞれの地域で町の表情が異なるアゼルバイジャンは、今も新しい姿に変貌しようとしている。そのダイナミズムを感じるのも、アゼルバイジャン旅行の面白さかもしれない。✿

バクー 風景



